

自分の敵を愛する

マタイの福音書 5章 43-48節

はじめに

私がウェルカム・サンデーで説教をする時には、マタイの福音書 5-7章に書かれているイエス様の説教からお話することになっています。この説教は、イエス様が山の上で語られたので、「山上の説教」と呼ばれています。

今日の聖書箇所ではイエス様は、「**あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め**」という当時の律法学者・パリサイ人たちの教えについて教えています。

1. 律法学者・パリサイ人たちの隣人愛

「あなたの隣人を愛しなさい」という律法は、旧約聖書のレビ記 19：18 に書かれている有名な律法です。そこには「**あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい**」とあり、イエス様御自身も、この律法を最も重要な律法の一つだと言われました。

しかし「あなたの敵を憎め」という律法は、旧約聖書にはどこにも書かれていません。これは、律法学者・パリサイ人たちが旧約聖書全体から解釈して付け加え、群衆に教えていたもののようです。というのは、先の「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」というレビ記 19：18 の律法の前後には、「**心の中で自分の兄弟を憎んではならない。同胞をよく戒めなければならない。…あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない**」とあって、律法学者・パリサイ人たちは、自分たちが愛すべき隣人というのは、同胞のイスラエルの民、つまりユダヤ人だけだと考えたのです。ですから同胞のイスラエルの民、ユダヤ人以外の異邦人は愛さなくてよい、憎んでもよいと考えたのです。

旧約聖書を見ると、イスラエルの民、ユダヤ人たちは常に異邦人との戦いの中にありました。そして異邦人たちから偶像礼拝が持ち込まれ、イスラエルの民、ユダヤ人たちは神様の律法に背き、自分たちの身に神様の裁きを招きました。その意味で、神様の律法に従わず、偶像礼拝を行う異邦人は、イスラエルの民、ユダヤ人にとって敵であり、憎むべき存在だと考えられたのです。

しかしイエス様は、そのような律法学者・パリサイ人たちの教えに対して、44節でこのように言われます。「**しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい**」。律法学者・パリサイ人たちは、自分の敵は憎んでもよい、自分に害を与える人は憎んでもよいと教えていました。しかしイエス様は、自分の敵を愛し、自分に害を与える者のために祈れと言われるのです。

律法学者・パリサイ人たちは、自分たちが愛すべき隣人というものを限定していました。

自分たちには愛すべき人と愛さなくてよい人がいると考えたのです。しかしイエス様は、あの有名な「善きサマリア人」の譬えでも教えられたように、私たちにとって愛さなくてよい人などいない、私たちにとってすべての人が愛すべき隣人だと教えられたのです。イエス様は、私たちの敵を愛し、私たちに害を与える人のために祈り、それらの人の隣人になること、それこそが、神様が求めていることだと言われるのです。愛しやすい人を愛することではなく、愛しにくい人を愛することにこそ、本当の隣人愛がある、そこでこそ私たちの本当の愛が試されるのだと言われるのです。

46-47 節にはこうあります。「**自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか**」。自分を愛してくれる人を愛する、自分に挨拶をしてくれる人に挨拶する、これは誰にでもできることです。神様の律法に従わない人だって、偶像礼拝をする人だってできることなのです。では、イエス様を信じ、神様との交わりに生き、神様に従っている人にしかできないことは何でしょうか？それは、自分の敵を愛し、自分に害を与える人のために祈ること、自分を愛してくれない人を愛し、自分に挨拶をしてくれない人に挨拶することではないでしょうか。それは無条件に人を愛し、一方的に人を愛するということではないでしょうか。

2. 天の父の恵み

なぜなら神様御自身が、そのように無条件に人を愛し、一方的に人を愛される方だからです。イエス様は 45 節で、このように言われます。「**天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです**」。神様は、神様を信じる人にも信じない人にも、太陽の恵みを与え、神様に従う人にも神様に従わない人にも雨の恵みを与えられます。これは、神様の「一般恩恵」と呼ばれます。神様は、神様を信じる信じない、神様に従う従わないに関わらず恵み深い方です。ですからイエス様を信じて、神様の子どもとされた私たちも、神様を信じる信じない、神様に従う従わないに関わらず恵み深くあるべきなのです。また私たちの敵を愛し、私たちに害を与える人、愛してくれない人、挨拶をしてくれない人をも愛すべきなのです。

子どもは親に似るものです。神様の子どもである私たちも、神様に似るべきなのです。48 節でもイエス様は、「**あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい**」と言われました。私たちは、神様ご自身のようであるべきなのです。それこそが神様の栄光を現すということなのです。

イエス様は、「**人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです**」と言われました。私たちの「良い行い」とは、神様のようであることです。私たちが神様のようにならなければならないこと、神様のようにならなければならないこと、そのことによって人々は神様を知り、神様を信じ従うようになるのです。

3. 敵を愛し、迫害する者のために祈られたイエス

イエス様は、目に見えない神様を、目に見える形で表してくださった方です。イエス様は、ご自身の言葉の通り、「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈られた」方です。

イエス様は律法学者・パリサイ人たちに妬まれ、十字架に付けられました。まさに迫害を経験され、殉教の死を遂げられたのです。しかしイエス様は十字架上で、自分を十字架に付けた者たちのために、こう祈られました。「**父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです**」(ルカ 23:34)。

またイエス様は、使徒パウロがご自身の敵としてクリスチャンたちを迫害していた時に、彼の所に現れてこう言われました。「**サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか**」「**わたしがあなたのところにも現れたのは、あなたがわたしを見たことや、わたしがあなたに示そうとしていることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである**」(使徒 26:14、16)。イエス様は、ご自身の敵としてクリスチャンたちを迫害していたパウロを愛し、赦し、彼にご自身の福音を伝える働きを委ねられたのです。

イエス様ご自身は、まさに「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈られた」のです。イエス様は弟子たちに、「**あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい**」(マタイ 28:19-20)と言われました。イエス様は私たちに、ご自身の弟子となることを求めておられます。イエス様の弟子とは、イエス様が命じられたことを守る人であり、イエス様のように生きる人であり、イエス様に似る人になることです。それはつまり、「自分の敵を愛し、自分を迫害する者を愛する」人です。

イエス様を信じ、イエス様の弟子とされた私たちは、イエス様のように生きなければなりません。自分の敵を愛し、自分に害を与える人のために祈り、自分を愛してくれない人を愛し、自分に挨拶をしてくれない人に挨拶する、そして無条件に人を愛し、一方的に人を愛する、それこそイエス様の弟子としての生き方です。

しかし私たちは一つ注意しなければなりません。それは、愛とは何でも受け入れるということではないということです。自分の敵を愛し、自分に害を与える人を愛するという時に、このことが問題になってきます。パウロは、I コリント 13 章で、愛についてこう語っています。「**愛は寛容であり、親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、不正を喜ばずに、真理を喜びます。すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます**」(I コリント 13:4-7)。愛は、寛容であることです。また人がした悪を心に留めないことです。またすべてを耐え、信じ、望み、忍ぶことです。しかし愛は、「不正を喜ばずに、真理を喜ぶこと」でもありません。愛は決して、不正を喜ぶことではありません。相手が不正を犯しているならば、戒めなければなりません。そして相手が真理に立ち返るように祈らなければなりません。

おわりに

最後に私たちは、自分は何者であったのかを覚えたいと思います。私たちは神様に造られ、命を与えられ、生かされています。しかし私たちは、アダムとエバが神様に背いて禁断の木の実を食べて以来、罪の性質を持って生まれて来ました。神様を愛さず、隣人も愛さず、自己中心に生きてきました。そして神様に背を向け、隣人を傷つけ、自分を見失って生きてきました。まさにそれは、神様の「敵」として生きてきたと言えます。

パウロもこう言っています。「**私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです**」(ローマ 5:8-10)。パウロは、はっきりとイエス様を信じる前の私たちは、神様の「敵」とであったと言います。その敵であった私たちを、神様が愛してくださり、イエス様を遣わし、イエス様の十字架と復活によって、私たちを御自身と和解させ、救ってくださったのです。イエス様ご自身も、「敵」であった私たちのために、ご自身の命を献げて、十字架で私たちの罪を償ってくださったのです。

私たちは、自分が何者であったのかを知らなければなりません。自分が神様またはイエス様の「敵」として歩いてきて、それでもなお神様とイエス様に愛されたことを知らなければなりません。自分の敵を愛し、自分に害を与える者のために祈ること、自分を愛してくれない人を愛し、自分に挨拶してくれない人に挨拶すること、それは何も特別なことではなく、私たちが神様とイエス様にしてもらったことです。私たちが神様とイエス様にしてもらったことを、隣人にもすること、それこそ神様の子ども、イエス様の弟子としての生き方です。

自分が何者であったのかも顧みず、気負って隣人を愛そうとしても上手に愛せません。まずは自分がかつて何者であったのかをよく知ることです。愛される値もなかった自分が愛されたことをよく知る事です。自分勝手に生きてきた自分が愛された奇蹟をよく知る事です。

そして具体的に隣人を愛せなくても、隣人のために祈ることです。愛の一つの形は、祈ることです。愛せなくても、挨拶ができなくても、祈ることから始めてみましょう。自分の敵、自分に害を与える人、自分を愛してくれない人、自分に挨拶してくれない人のために祈ることができたら、それもまたその人を愛していると言えるのではないのでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは愛において貧しい者です。自分を愛してくれる人だけを愛して、自分は愛のある者だと思い込んでしまいます。自分を愛してくれない人、自分に害を与える人を愛してこそ、私たちの本当の愛が計られます。神様の子どもとして、イエス様の弟子として、隣人を愛することができますように。かつてあなたの敵であった私たちが、いかにあなたに愛され、赦

されたかを深く知り、へりくだらせてください。

あなたのような愛を持つ者として、あなたの栄光を現すことができますように。私たちが隣人と隣人でない人を区別することなく、自分に不都合な人をも隣人として受け入れ、祈ることができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。